

## ◆外 科

前年度に引き続き外科は2人体制で診療を行っている。2016年度の手術件数は、2015年度の79例に対し80例で前年度並だった。全麻手術は、前年度65例から52例と前年度の80%だった。

悪性新生物は前年度と同様18例となった。内訳は胃癌が前年と同じく4例だった。うち腹腔鏡下胃切除術は2例施行した。大腸癌は8例で、うち直腸癌は1例だった。肝胆膵領域では肝切除を1例行った。2016年度の乳癌は4例だった。

胆石・胆嚢炎では計22例の手術を行い、腹腔鏡下胆嚢の手術を17例行い鏡視下手術の遂行率は77%だった。急性虫垂炎は10例で、うち7例に鏡視下手術を行った。単径・大腿ヘルニアは26例だった。

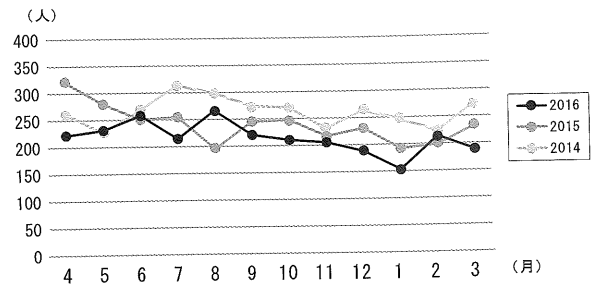
鏡視下手術の総数は26例で全手術症例の32.5%を占めた。

地域の高齢化に伴い当院の手術患者の高齢化も著しい。70代、80代、90代の年代別で見るとそれぞれ19例、21例、3例だった。90歳代の3例は2例が乳癌で、1例が大腸癌だった。最高齢は98歳だった。

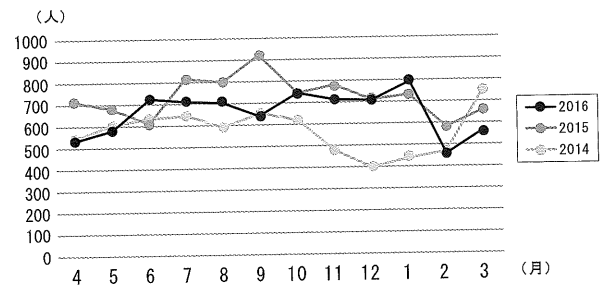
当科では、熊本市内の病院で癌治療を行いその後遠距離のため通院治療が困難な患者に対して外来化学療法を提供している。

終末期の患者でも希望するかぎり周辺の訪問看護ステーションと協力し在宅ケアを提供している。最期を病院で希望されていても、家族とともに在宅ケアを行っていくことで在宅での看取りを希望されるような場合もあり、在宅看取りとなることもある。在宅ケアでは家族が主となりケアへ関与する度合いが高いため、最期まで介護できたという気持ちを持たれる遺族が多いように感じられる。患者の在宅の希望と遺族ケアの観点からも今後も努力していきたい。

外来患者数推移



入院延患者数推移



OP件数推移年度比較

